『大人(おとな)の色(いろ)』

作者　淺羽　一

百均の物じゃない、高くて鮮やかな口紅とマニキュア。指輪に付いている、ガラス玉じゃない小さなルビー。昨夜のドラマでヒロインが着ていたような、背中の大きく開いたドレス。ずいぶん前に映画で見た、イタリアの海沿いの街を夕焼けに溶けるみたいに走っていたオープンカー。今年の誕生日にねだって買って貰った、まだ少し歩きづらいエナメルのサンダル。

子供には似合わないその色は、だからこそ私の目に何よりも綺麗に映っていた。

「服、着なよ」

お小遣いをはたいて手に入れた上下セットの下着は、色素の薄い肌に代わって、きっと私を大人っぽく彩ってくれていたはずだった。

それなのにタケルは、私に触れようともせずに、自分のベッドに腰掛けたまま「いくら夏でも、冷房の効いた部屋でいつまでもそんな格好をしてたら、お腹を壊すよ」と、穏やかな口調ながらもあっさりと言った。

私は、どうしてだか泣きそうになりながら、けれど必死に涙を堪えて聞いた。「どうして、セックスしないの」と。「私って、そんなに魅力ない？それとも、本当は私の事なんて好きじゃない？」。

私よりも僅かばかり背の低い彼は、私の前に立って、柔らかい表情でこちらを見つめながら、「そんなんじゃないよ」と頭を撫でてきた。まるで、駄々っ子をなだめようとするみたいに。「ユナの事は大好きだし、セックスだってしたいと思うけど。でも、だからって無理して焦る必要は無いんじゃないかな」。

反射的に、私は言い返していた。「無理なんてしてない」。

直後、タケルは「震えてるよ」と、そっとこちらの手を握ってきた。

そして私は初めて気付く。確かに彼の手の中で、私の指先は小刻みに震えていた。

「な。だからさ、とりあえず服を着なって」

だけど私は、タケルの言葉を無視して、彼のそれから自分の手を抜いた。思わずといった感じで彼が名前を呼んできたけれど、やっぱりそれも無視して淡々と言った。「そんな風に、格好付けないでよ」と。

「おっきくなってるじゃない。したいんでしょ。だったら、しようよ。胸だって、私、結構あるんだよ。タケル、おっぱい好きでしょ」

「そりゃ、まぁ…」

「何だってしてあげるよ。何したって良いんだよ。大丈夫、やり方とかはちゃんと分かってるし。それにタケルだって、周りに自慢できるじゃない」

己の言葉を証明する為に、私は体を押し当てるように彼に抱きついた。厚くはないけれど硬い胸から、鼓動が伝わってくる。いつもより早い動悸に、彼の方こそ無理して我慢しているのだと悟る。事実、お腹に生暖かくて固い感触もする。

しかし、そうまでしても尚、タケルは私を抱こうとしなかった。それどころか、「あのさ、何でそんなに焦ってるんだよ」と心配そうな声を出してきさえした。

いい加減、腹立たしくなってきて、思わず彼から体を離して「どうして分かってくれないのよ」と怒鳴った。「私は、早く大人になりたいの」。

タケルは、少なからず驚いた表情で動きを止めていたけれど、やがて困惑と呆れが混じり合ったみたいな顔になって言ってきた。「セックスしたからって、大人になんかなれな

いよ」。
正直、その妙に悟った風な態度は、さらに私を苛つかせた。「…何よ、それ。やっぱり私の事、ガキだって馬鹿にしてるんでしょ」。
「あのなぁ…。そんなんじゃないって。俺はただ―」
「もう良いっ」
「ユナ…」
「タケルには分かんないんだよ。何よ、たった一つしか違わないのにそっちばっかり大人ぶってさ。もう良いよ。タケルには頼まないから」
「ちょっと待てよ。俺には頼まないって何だよ。それじゃあ、他の男に頼むって事かよ」
「タケルには関係ないでしょ」
「関係ないわけないだろ。俺達、付き合ってるんだから。って言うか、ちょっと冷静になれって、マジで。ユナ、絶対に分かって無いって。そんな適当にヤったりして、まずい事になったりしたらどうするんだよ」
「何よそれ」
「…それは、例えば、妊娠とか」
「そんな簡単に妊娠なんかするわけないじゃない」
「分からないだろ、そんなの」
「って言うか、したらしたで良いじゃない」
瞬間、売り言葉に買い言葉で口から出た内容に、私は自身でも驚いて動きを止めた。タケルもまた「…それ、本気か」と、今度こそ紛れもなく呆れた様子を見せてきた。
果たして、それは本当に自分の本音だったのか。それとも単に、反抗したくて紡いでしまった妄言だったのか。真偽は、私にも分からないけれど。だけど、それでも私は確かに、こう言った。「子供が出来たら、親になるんだから。一番簡単に大人って認められる手段じゃない」。
「恐ろしい事を言うな…」
そう呟いたきり、タケルはもう何も言い返してこなかった。丸く見開かれた瞳が、真っ直ぐにこちらを凝視していた。
私はタケルの視線から逃げるように、顔を逸らして、傍らに落ちていた買ったばかりのワンピースを拾って着た。あまりにも乱暴に袖を通したせいで、何本か糸のちぎれる音がしたけれど、構わなかった。そして、背中のファスナーを上げるのもそこそこにカバンを掴んでドアに向かった。
「待てよっ」
そこでようやく、タケルがこちらを止めようとしてきたけれど、私は「離してっ」と肩に置かれた手を払ってドアを開けた。それから「もう放っといてよっ」と、拒絶の言葉をぶつけて部屋を出た。両親が用事で他に誰もいない彼の家は、静かすぎるほどに一切の音を感じられなくて、だからこそ余計に私の声だけがやけに大きく響いて聞こえた。
私は振り返らずに玄関まで走った。背後の廊下に、足音はしなかった。踵が高すぎて履き慣れないサンダルに足を突っ込んで、外へ飛び出す。途端に暑い日差しが肌と目を焼いてきたけれど、彼の部屋に戻る気は微塵もなかった。
早足で歩いている内に目の奥が痛くなってきて、だけど泣いたら負けだと思って、勢い

よく空を見上げたら、太陽をまともに見てしまって涙が出た。すると、一度でも溢れてしまったせいか、涙はまるで止まる事なく流れ続けた。止めようと何度も何度も目をこすったけれど、せっかく一時間半も掛けて丁寧に施した化粧が手の甲に移っただけで、私のプライドはポロポロと頬を伝って地に落ちた。せめて、泣き声だけは上げたくなくて、必死に歯を食いしばって、息を飲み込んだ。何度かしゃっくりみたいに喉が震えて、思わずむせそうになったけれど、それでも子供じみた嗚咽を上げる事だけはせずに済んだ。幸か不幸か私を呼び止める人はおらず、足は多少なりと速度を下げたもののずっと動かしていた。

しばらくして、ようやく落ち着けたものの、このまま家に帰る気にはなれなかった。太陽がまだ高い位置に浮かんでいるとか、夕食まではまだまだ時間があるとか、そんな事が理由じゃなくて、ママに「せっかくの夏休みも終わりだし、タケルと遊びに行ってくるから。もしかしたらちょっとだけ遅くなるかも」と言って出てきてしまっていたからだ。嘘が発覚してしまうかも知れないのが恐かったと言うよりも、もっと単純にこれで帰って「あら、早かったのね」などと言われるのは情けなさ過ぎる気がしたのだ。

私は、とりあえず足を駅の方に向けた。とにかくそこのトイレで化粧を直して、それから電車で人の多い街まで行って、後はぶらぶらとウィンドウ-ショッピングでも楽しもうと決めた。華やかで活気のある街を、それも地元から少なからず離れた土地を、大人に混じって歩いていれば、きっとすぐにでも気が晴れてくれるだろうと期待して。カバンの中でしつこいくらいに携帯電話が震えていたから、電源を切った。

急行や特急電車など停まらない小さな駅のトイレはお世辞にも綺麗と言えなくて、ちょっとだけ別の場所に入れば良かったと後悔したけれど、不細工な顔でこれ以上人前を歩くのも嫌だったから、我慢した。

お気に入りの色のカバンを洗面台の隅に置いて、その中のポーチから化粧道具を取り出す。髪を留めて、崩れた化粧を全て落として、一度、鏡を見た。同じクラスの女子達とは明らかに異なる体型とは対照的に、見ようによってはむしろ同い年の少女よりも幼く感じられるかも知れない顔が現れる。それは、何だか無性に不均衡な印象を抱かせてきて、私はすぐに化粧を始めた。今ではもう慣れた指先は、あっという間に顔を首から下に合わせて変える。そうしてようやく、鏡の中から気持ちの悪い違和感が薄れていく。改めて、それこそが真に己のあるべき姿だと確信した。いつしか、心の中からも嫌な気持ちは消えていた。

こちら側のホームには他に誰もいなかったから、サンダルを脱ぎ、いささか行儀の悪い格好で冷房の効いた待合室でくつろいでいると、しばらくして電車がやって来た。四両編成の各駅停車は、決して満員でなかったけれど、横一列に並んだ座席にはちらほらと人影があった。見知った顔はなかったが、やはり夏休みの最終週と言うせいか、座っているのは見た感じ中高生くらいの年頃の人間ばかりだった。

十分ほど電車に揺られてから、途中で急行電車に乗り換え、さらにもう約二十分。やがて到着した終点の駅は、地元のそれとは比べるのも馬鹿らしくなるほどに大きく、活気もあった。光沢のある床のタイルが綺麗なプラットホームに降りた途端、香ってきた匂いまで違う風に感じられた。

私は背筋を伸ばして歩き出した。電車で座って休めていたので、足もずいぶんと楽になっていたけれど、それでも無理をして痛くなっては困るので、歩調はゆっくりと、その分、

態度を堂々とさせた。私は大人で、余裕を持っていて、変に焦ったりなんてする必要がないくらい完璧なんだと、催眠術のごとく自らに言い聞かせた。すると実際、そうやって前を向いて歩いている内に、徐々にだが本当に不思議な自信が湧いてきた。知り合いなんて一人もいなさそうな街でこうしている私は、きっと誰の目にも本物の「大人」に見えているはずだという気さえしてきた。そうしたら、何だかタケルに対して怒っていた自分が、妙に子供っぽくて情けなかったようにも思えてきた。

「…謝ろっかな」

人通りの多い駅近くの商店街の真ん中で、足を止めて携帯電話を取り出した。そして通行の妨げにならないように道の端に行き、電源の入っていないそれを見下ろす。

同じ住宅地に住んでいて、さらには通っていた保育園も一緒で、そんな頃からずっと幼なじみとして過ごしている内に、いつしかその延長として恋人同士になった。だから彼の考えている事は大体なら分かるし、実を言えば自分がとても大切に想われているんだと言う事も自覚している。事実、彼は優しい。たった一年、私よりも早く産まれただけなのに、いつも私の事を大事に大事に守ろうとしてくれる。ここ最近は、昔に比べて一緒に過ごせる時間が減っていたけれど、そんな事にも関係なく、私をちゃんと大切に扱ってくれる。

だけど私は、それを本当に嬉しく感じながらも、時折、彼のそんな態度にやるせない気持ちを抱いてしまうのだ。「馬鹿にされている」とまでは言わないけれど、タケルは全然、「本当の私」を見てくれていないから。勿論、タケルの事は好きだ。本当に、大好きだ。そうだからこそ余計に、腹立たしい。

私は携帯電話をカバンに戻し、再び歩き出した。止めよう、あれやこれやと考えるのは、少なくとも今だけは。どうせ電話をした所で、そこでの話の内容が良いにせよ悪いにせよ、今日はもう彼と会う気になれないだろうし、だとすればせっかくの「大人」の時間をつまらなくしてしまうかも知れない可能性なんて最初から排除してしまった方が良い。そうだ、そうに決まっている。

ほんの束の間、うつむき加減になりつつあった背筋を改めて伸ばし、前を向く。近付いてくる夏の終わりに抗おうとするみたいに、華やかな彩りで飾られている街の景色は、そこを歩く人々の明るい感じと相まって、同じ空間にいるだけで楽しくなれそうな雰囲気を放っている。私もまた、それに逆らうことなく、心に思い付くまま、心の赴くままに、店に入っては雑貨を愛で、服を試着し、ＣＤを聴いて、冷たいアイスに笑みをこぼす。スモモとカシスの二種類のアイスを渦巻き状に混ぜられたそれは、見た目も綺麗で、何より絶妙の甘酸っぱさがとても爽快で、夏に最適なデザートだった。

「ねぇねぇ、一人？」

と、ちょっとした広場の片隅で、アイスを片手に至福の意味を味わっていた時だった。唐突に、大学生くらいの茶髪の男が横から声を掛けてきた。「あ、それ、あそこの店のでしょ。良いよねぇ～、マジで美味いもんね」。

私はと言えば、普段、同級生の男子にからかわれる事こそあれ、本物のナンパというものを実際に体験した事なんてこれまで一度もなかったので、咄嗟に何かを返す事など出来ず。情けなくも、驚きに口をポカンと開いたまま相手の顔を凝視してしまっていた。

「俺もたまに買うんだけどさ。でも、それは無いなぁ。夏季限定のアイスだよね」

薄手の長袖シャツにジーンズ姿と言うその人はこちらの応答を待たず、ベンチに腰掛け

る私の隣りに並んできた。その距離は思わず体を退いてしまいそうになるくらい近くて、
「どんな味なの」と聞かれても舌の感覚なんてとっくに消し飛んでしまっていた。
「俺はアキト。アッキーで良いよ。君は？」
「え、その、私は…」と、突然の事態に戸惑いながらも、許容なのか拒否なのかそれとも単に自己紹介なのか、自身でもきちんと把握せぬまま、私が口から出るに任せて返事をしようとした、その瞬間。
「あ、待って」
自分から聞いてきたくせに、「アキト」と名乗った彼はいきなり真剣な表情を浮かべて、そう言った。
私はわけが分からず、ただ言われた通りに続くはずだった声を呑み込んでしまう。すると彼は一転、子供っぽい笑顔になって「俺が当てるから。俺、実はエスパーだったりするんだ」と言ってきた。
私はますます混乱し、だけど同時にあまりにも自信たっぷりなその態度に、仄かな興味が生まれているのも自覚していた。
彼はこちらの心情を悟ったのか、「決定だね」と嬉しそうに言うと、ジッと目を覗き込んできた。それはあまりにも真っ直ぐな眼差しで、何故だか変に意識して視線を逸らしてしまう事の方が恥ずかしいように思えて、私にはもうさっさとその場を離れるどころか、彼から顔を背けるだけでさえ出来なかった。
「何だか、『偶数』が関わっている感じがする」
不意に静かな口調で彼が言った。私は「どうせ適当な事を言っているんだろうな」と思いつつも、直後に自分の名前の文字数が偶数である事に気付き、内心で驚いた。
「そうか。例えば、名前が偶数なんだ。二文字とか。ね、どうかな」
まるでこちらの考えを読んだみたいに、彼は言う。私はそれに対して、ただ見つめるだけで応える。すると彼は、「ほら。俺が当てていってるんだから、正解かどうか答えてくれないとダメじゃない」と、僅かに苦笑めいた表情を浮かべた。
私は、実の所、何処か釈然としない気がしていたが、それでもあまりに当然のごとくそう言われたので、「なるほど、それもそうか」と納得してしまった。
「…一応、正解です。確かに、私の名前は、二文字です」
「やった。ここまでは正解だね。じゃ、次。やっぱり偶数が関わってる気がするんだけど。漢字で書いても、そうじゃない？」
「そうですね」
「でしょ。しかもしかも、ローマ字に変えても、やっぱり偶数だ」
言われて初めて、私は知った。確かに、私の名前はローマ字で書いても、アルファベットの数が偶数になる。我知れず「凄い…」と漏らしてしまっていた。
「どうやら、『2』って言うのが、君の運命数みたいなものなのかも知れないね」
「え。でも、ローマ字で書いたら四文字ですよ」
「うん。だけどさ、母音が二つ使われているよね」
「…あ、確かに。母音は二種類ですね」
「それで、やっぱり子音も二つじゃない？」
「はい。子音も、その通りです」

「だったら、ほら。やっぱりみんな『2』だろ」
彼は明るく笑いながら、右手の人差し指と中指を立ててVサインをした。
そこで私は、心底では少なからず感心しながらも、ふと意地悪をしてみたくなって、聞いた。「それで、肝心の名前は、どうなんです」と。
すると彼は視線を固定したまま、「うぅ～ん」と眉を寄せて上げるという不思議な表情を浮かべ…。
「…ユカ」
一瞬、ドキリとした。
「レナ、マキ。この三つくらいが、良い線行ってると思うんだけど…。どうかな」
伺うように眼差しを向けてくる彼に、私はちょっとだけ迷ったものの正直に答えた。「残念ですけど、三つとも違いますね」。
彼は「あ～…。外れたかぁ～」と、言葉とは裏腹に楽しげな態度をして見せた。釣られて私も笑っていた。
「でも、惜しかったですよ」
「本当に？」
「はい。途中とか、ちょっと本気でビックリしましたから」
「それじゃあ、正解は？」
「えぇ～…。これで教えるのって、何だかちょっと狡くないですか」
「だけど惜しかったんでしょ」
「それは、そうですけど」
「だったら、残念賞って言うか『惜しかったで賞』って事で、下の名前だけで良いから答合わせさせてよ」
ほんの束の間、どうしようかと考えたけれど、下の名前くらいなら教えて上げても問題ないと思い、答える事にした。それに、正解を聞かされた彼がどんな反応をするのか、見てみたい気もあったし。
「ユナです」
途端、彼は大げさな仕草で「マジで～。本当に惜しかったじゃん」と嘆いて見せた。そのあまりと言えば芝居がかった雰囲気に、私は素直に面白いと感じる。いつしか、目を見る事への抵抗は無くなっていた。
「ユナちゃんかぁ…。今までの学校の同級生とか思い出してみても、その名前の女の子は初めてだよ。何か、特別な感じがして良い名前だね」
「え、本当ですか」
「あぁ。マジで」
「…ありがとうございます。嬉しいです」
それは正直な感想だった。だって、「特別だ」なんて、ほとんど言われた記憶が無かったから。沢山いる中の一人じゃなくて、ただの一人として認められたみたいな気がした。勿論、それは多分にお世辞を孕んだ言葉だったのだろうけれど、それでも私にとってはそれこそ特別なものだった。「やっぱり、年上の大人の人は違うなぁ」と、タケルには申し訳ないが思っていた。
「あっ…」

と、唐突に彼が焦った風な声を上げた。
「どうしたんですか」
私が尋ねると、彼は「それ、それ」とこちらを指さしてきた。そして私はそれに従って視線を移し―。
「あっ」
やはり同じように声を上げた。幸いにして、服には落ちていなかったものの、手の中のアイスはもうすっかり解けてしまっていて、コーンを握る指に淡い色が垂れていた。
「ごめん。せっかくのアイスだったのに、台無しにしちゃったね」
彼は言いながらズボンのポケットからハンカチを取り出し、私の手を拭いてくれる。「あ、そんな、大丈夫ですから」。私はもの凄く自然に手に触れられた事よりも、相手のハンカチを汚してしまった事に焦って、反射的に手を引こうとした。
「マジでごめんね。あんまりにも話が楽しくて、忘れちゃってた」
だけど彼は逃げようとする私の手を、それよりも先に綺麗に拭いて、それから柔らかくなったコーンを指でつまんだ。「あの、それ」。私が手から離れたコーンを目で追うと、彼は「お詫びに新しいのを驕るよ」と、ふにゃふにゃのそれを軽く振った。コーンの中にはまだアイスの名残が溜まっていたけれど、器用な事に彼の指が液体に汚される事は一度もなかった。
「良いですよ、別に。そこまでしてくれなくても」
そろそろ日は傾き始めていて、私は彼の申し出を断ろうとした。今から帰れば、家の夕食に間に合うかなと考えたのだ。遅くなると告げて出てきていたが、何かしらの用意はしてくれているだろう。それに、見ず知らずも同然の相手に何かを驕って貰うというのは、気が引けると言うよりも少し恐かったし。
けれど彼は「遠慮しないで」と人なつっこい笑顔で軽く言って、立ち上がった。「すぐ近くに知り合いがやってる店があるから。基本はカフェ-バーなんだけど、デザートも揃ってるとこなんだ。それに、だいぶと雰囲気も洒落てて、良い店だし、気に入ったら周りにも宣伝して欲しいしさ」。
…私は、迷った。冷静な部分では「早く帰った方が良い」と考えていたが、同時にそんな店に行ってみたいと言う気持ちもあった。だって、そこはきっと格好良い大人達が集まる場所なんだろうと、勝手に想像出来たから。
彼はそんなこちらの逡巡を悟ったのか、「じゃあさ」と再び空いている方の手の指を二本、私の前で立てて見せた。「例えばの話なんだけど、ユナちゃんはケーキとワッフルなら、どっちが食べたい？」。
私は突然の質問に僅かな間だけキョトンとしてしまうも、やがて気付けば頭の中に浮かんでいた両者を比べてみて、こう答えた。「…えぇと。どっちかって言ったら、ケーキ、かな」。
途端に彼は嬉しそうな表情になり、「だったら決まり。その店、ケーキがマジで美味いんだよ」と、指を立てていた手で私の手を取ってきた。
「ちょ、ちょっと」
「あれ。もしかして、どうしても時間が無いとか」
「いや、そう言うわけじゃ無いですけど…」

「じゃあ良いじゃない」
彼は私を引っ張り、立ち上がらせる。私はまだ、「でも…」などと口から漏らしていたものの、いつしか抵抗しようとする気はほとんど失せていた。そして彼は「きっと満足してくれるって」と、私の手を握ったままさっさと、それでいてこちらの歩調も気遣ってくれながら、人込みを分けて歩いていく。もしかすると、その妙に憎めない強引さが、私にとって見知らぬ人間に付いていくと言う行為への言い訳となってくれていたのかも知れない。
ドキドキと胸を打つ鼓動の理由は、年上の男性と手を繋いでいた事か、それとも今から訪れる店への期待感か、はたまた別の何かなのか、自分でも判然としていなかったけれど。ただ、それが心地よくもあったのだけは、確かだった。
「…アキトさん、でしたっけ」
「うん、そうだよ。凄いね、一発で名前を覚えててくれたなんて。でも、アッキーで良いよ。俺もユナさんじゃなくてユナちゃんって呼ばせて貰ってるし」
「じゃあ、アッキー」
「何？」
「どうやったら、大人になれると思いますか」
相手にばかり話をさせて、自分は黙って歩くのも変だと思い、敢えて探した話題だったが、言った直後にそんな質問こそ奇妙だった事に気付く。ましてやろくに知りもしない相手なのだから、こちらの真意を理解してくれるはずもなく、きっと少なからずおかしな女だと思われた事だろう。現に、足こそ止めなかったものの、彼は言葉を途切れさせた。
「……どうしたら、か」
だけどアッキーは、こちらが想像したよりも遙かに早く声を取り戻すと、そんな雰囲気を微塵も感じさせることなく、それどころか一転して静かな表情を浮かべて、「う～ん、そうだなぁ」とまるで真面目に問いかけに対する答を考えてくれている風な呟きを漏らした。
数秒後、彼は「…それはつまり、単純に歳を取ったらとか、そう言う意味じゃ無いんだよね」と、ゆっくりとした口調で聞いてきた。
私は、軽く驚いてしまった。まさか、こんな哲学的を通り越していっそ頭の悪そうな質問に、それほどまでに真剣に応えてくれるなんて思っていなかったから。
アッキーは「人それぞれだと、思うけど」と前置きをしてから、「ユナちゃんにとっての『大人』って、具体的にどんなイメージなの」と言った。
私はそれに即答しようとして……愕然とした。言われてみれば、漠然と「大人になりたい」と考えていても、どんな人間が大人なのかと言う事柄をちゃんと己の中で整理した事はほとんど無かったのだ。「それは…。…やっぱり、格好良くて、自分で何でも決められて、色んな事を知ってて」と、思い付くままに「大人の条件」を並べてみても、正しいはずだと思う反面、何故だかしっくり来ない感じも大きかった。
彼はそんな私をしばらくの間無言で見つめた後で、「こんな事を言ったら、怒られるかも知れないけど。ユナちゃんって、『大人になりたい』ってよりも、『子供でいたくない』って気持ちの方が、実は強かったりしない？」と聞いてきた。
瞬間、自分の中の何かを鷲掴みにされた気がした。それが果たして何であるのか、そん

な事はまるで分からなかったけれど、不思議と拒否感はなかった。相手はほとんど見知らぬ人間で、警戒心を抱いていて然るべきとさえ言えるかも知れないのに、むしろ無関係な人間だからこそ、本音を言っても良いような気すら湧いてきた。
彼は言った。「俺からしたら、ユナちゃんは十分に大人っぽいけど」。
私は返した。「でも、それって結局は『子供だ』って事でしょ」。
「そりゃまぁ、そう言われれば、そうとも取れるけど…。え、って言うか、ユナちゃんって何歳なの。俺、てっきり高校生くらいだとばっかり思ってたんだけど。実は大学生だったとか」
「違いますけど…」
「じゃあ、逆にまさか中学生？」
「…それも違います」
「あぁ、やっぱりそうだよねぇ」
アッキーは満足そうに頷くと、優しそうな笑みを浮かべて言った。「だけどさ、それなら大丈夫、自信を持って良いって。さっきも言ったけど、俺の目には十分、ユナちゃんは『大人』として映ってるから」。その、余裕のありそうな声音が、私の耳にはまさしく大人の象徴めいて聞こえていた。
「…私、顔がガキっぽいでしょ」
「いやいや、そんな風には思わないって。可愛いとは思うけど」
「でも―」
「あのさ、顔が老けてるからって、そいつが大人の証拠になんかならないよ。要は中身の問題だろ」
「…そうですけど」
言われている内容を肯定しつつも、やはりまだ心の何処かで納得しきれない部分があった。
するとアッキーはそんな私の胸中を的確に判断したのか、「分かった。じゃあ、こうしよう。俺は今から、君を同年代の相手として扱うから。と言っても、俺だってまだ二十歳を過ぎたばっかりだけど」と笑いながら提案した。
素直な感想として、私は単純に嬉しかった。これ程までにきちんと私の話を聞いてくれて、しかも受け入れてくれて、さらにちゃんと尊重してくれる人間なんて、これまで一人もいなかったから。タケルには悪いけれど、いつしか自分の中ではアッキーに対して好意と呼べるだろう気持ちが芽生えていた。
「あ、ほら。見えてきた。その店だよ。小さいけど看板が出てるだろ」
と、繁華街から一本、通りを外れた道に入った直後、不意にアッキーが前方を指さした。
その先を目で追ってみると、確かに背の低いビルとビルの間から少しでも自己主張をしようとしているみたいに、小さなランプを備えた折りたたみ式の看板がアスファルトの上に立っていた。手前まで近付くと、ビルに挟まれたそこはトンネル状の細い通路になっていて、ライトの埋め込まれた床や天井は鏡張りだった。辺りはまだそこまで暗くなっていなかったけれど、ライトはもう完全に明かりを灯していた。
カフェと聞いて想像していた外観とはかなり違っていて、私は思わずそこに足を踏み入れる事を躊躇しそうになる。だが、アッキーは気にした様子もなく「ほら、行くよ」と私

の手を引き通路を進んでいく。合わせ鏡の迷宮に落とされてしまったと錯覚しそうになる通路は、光だけでなく話し声や音までも玄妙に反響させてきて、ヒールの固い音がやけに大きく耳に届いてきた。

距離感を狂わせる中を進んでいたせいか、実際には大した時間も掛かっていなかったはずなのに、唐突に側面の壁が消えて、代わりに真っ白い壁と螺旋状の階段が現れた時には、お洒落な造りをしているなと感心すると同時に、奇妙な安心感が生まれたのも事実だった。とは言え、そんな事を馬鹿正直に言ったら「やっぱりな」と思われる気がして、私はむしろ「どんなお店なのか楽しみ」とでも言わんばかりに彼の後に続いた。相変わらず手は繋いだままだったけれど、もう引かれてはいなかった。

狭い空間を、雲に足をかけ天へと昇っていくように進む。

やがて方向感覚が完全に初期化された頃、目の前に漆黒の光沢が美しい一枚の扉が現れた。その脇で壁に埋め込まれた小さなプレートには、筆記体のアルファベットで「Transient」と書かれてあった。意味は分からなかったけれど、それが却って一種独特の店の雰囲気を強く印象づけてきた。

澄んだ鈴の音を鳴らす扉を押し開けた途端、すぅと冷気が流れてきて、階段を上ったせいで僅かに汗ばんでいた肌に心地よかった。仄かに漂う甘い香りに、アッキーの「ケーキが美味しい」と言う言葉を思い出した。

「いらっしゃい」

落ち着いた低音の声が私達を出迎えてくれる。アッキーは慣れた様子で片手を挙げ、白いカウンターの向こうに立つ細身の男に「お疲れ」と気安い返事をした。黒いズボンと黒いシャツを纏い、シャツの袖を肘までまくり上げているバーテンダー風の彼は、黒い瞳を細め、やはり漆黒の髪を揺らしながら「今日はえらく可愛い子を連れてるな」と笑った。一拍置いて、それが自分を指しているらしいと悟った私は、ようやく喜びと照れくささを同時に感じていた。

「あ、その、ありがとうございます…」

少なからず緊張している事を悟られまいと意識していたはずなのに、吐き出せた声はかすかに上擦っていて。私は誤魔化す為と、きっと色を変えているだろう顔を見られない為に頭を下げた。耳に、アッキーとバーテンダーの柔らかな笑声が聞こえてきた。

「悪いね、開店したばっかりでいきなり来て」

「いつもの事だろ。それにまぁ、もうしばらくすれば、ちらほらと他の客もやって来るだろうさ」

「だったら、とりあえず今だけは貸し切り状態を楽しむかな。ね、ユナちゃん」

「え？」

急に話を振られて、どうして良いか戸惑っていると、バーテンダーの彼が「とりあえず座ったら」とカウンターの隅の席を指してきた。アッキーが「座ろっか」と前に立って歩き出した。

入り口とは反対側、店の奥に位置する席へと、扉から真っ直ぐに伸びる店内を穏やかな照明に導かれるように進む。席へと向かって右手にカウンター席、左手には等間隔置きに細いスチールの足を持つ銀色のテーブルが並んでいる。数席のテーブルは綺麗に磨かれ、カウンターを見ても美しい光沢を放つその表面は大理石めいていた。

アッキーが引いてくれた席に腰を下ろすと、スッと目の前にコースターが置かれた。白い上に映える黒い円形のコースターには、細い金字で店名が書かれていた。厚めの紙のそれを手に取った時、かすかに指がカウンター‐テーブルに触れた。ひんやりとしていた。

「あら、いらっしゃい。早いのね」

と、唐突に軽くも艶やかな声が響いた。視線を向ければ、カウンターの向こう側、壁のガラス棚に整然と並ぶ色とりどりの酒瓶を背にして、いつの間にかすらりとした三十代半ばくらいの女の人が現れていた。潤いを帯びた漆黒の髪をアップにまとめ、隣りに並ぶ彼と同じ様な黒い服を纏った彼女は、それでいて腰に鮮やかに染められたエプロンを巻いていた。モノクロームのごとき雰囲気を放つこの場にあって、エプロンのその色はとても美しく私の目を惹いた。自分にとって最も見慣れ、親しんでいる色のはずなのに、それはまるで見た事もないくらいに魅力的なものに映った。

彫りの深い顔立ちをした彼女は、「初めまして」と微笑んできた。それはまさしく「大人の女性」と言った感じのする態度で、私は生まれて初めて同性に見惚れて声を失った。すると彼女はそんな間抜けな反応にも「あら、可愛い」と楽しげに返してくれた。ますます頬が熱くなるのを自覚した。

「こら、アッキー。ダメじゃない、こんな可愛い子を誑かしちゃ」

大人びた口調が、かすかに弟を叱る姉みたいな柔らかさを宿す。

アッキーはそれに「勘弁して下さいよ、マキさん」と困った風に笑って、「俺はいつも真剣なんですから」と明るく言った。

マキと言う名らしい美女は、そんなアッキーを軽く無視して「こんな男には気を付けないとダメよ」と、こちらに向かってからかいめいた眼差しを浮かべた。

「ユナですっ」

気付けば私は自分の名前を口にしていた。

「そう、ユナちゃんね」と、マキはふわりと微笑んでから、「私はマキよ。よろしくね」と会釈した。

「こちらこそっ」

慌てて頭を下げたら、変に体を折ろうとしたからか足まで勢いよく上がってしまって、カウンターの底でしたたかに膝を打った。途端に、異口同音の笑声が生まれて、私はさらに顔に血が上るのを感じた。本当に、心の底から「どうして自分はこんなに幼稚なんだろう」と思って、泣きたくなった。きっと、今ならマキのエプロンよりも濃く私の顔は色づいているだろう。

「こら、男二人。あんた達が笑うから、ユナちゃんが困ってるでしょ」

己の事を完全に棚上げして自分達をたしなめようとするマキに、彼らは「そんな、理不尽な」と苦笑こそ浮かべたものの、それ以上は反論しなかった。それで、この三人の力関係が分かった気がした。

「ごめんね、ユナちゃん。笑っちゃったお詫びに、サービスするから。ほら、ジンくん」

と、マキが傍らのバーテンダーに言うと、「ジン」と呼ばれた彼は「はい、はい」と頷きながら、カウンターの下から一脚のカクテル‐グラスを取り出した。

我知らず感嘆の声を漏らしていた。縁をきらきらとした砂糖で飾られたグラスの中に、可愛らしいケーキが収められていたからだ。褐色に染まるクリームを丁寧に塗られた立方

体の表面は、天井からの明かりを受けて滑らかな光沢を放っていた。
「良いでしょ、これ。この店のお薦めの一つ」
横からアッキーが囁いてくる。異議なんてあるはずがなかった。
マキから差し出されたフォークを受け取り、そっと褐色の表面をなぞる。細い筋が三本、音もなく生まれて、私の指に挟まれた金色の先端には濃い色が付く。
思わず、舐めた。途端に、仄かな甘さと、大人びた苦味、それからふくよかな香りが口内に広がった。たったそれだけで、そのケーキが確実に美味であるだろうと実感した。事実、それは間違っていなかった。
甘味を控え目に、さりとて淡泊なわけでもなく、舌の上で新雪のように溶けるチョコレートと、しっとりと歯を包み込んだかと思えばさらりと離れる柔らかなスポンジの見事な調和は、鼻から脳を通って頭頂部へと抜けていくかのごとき芳香と相まって至福の一時を与えてくれる。
そうして私は、勿体なさを抱きつつも、体が欲するままにケーキを削ってはその欠片を口に運ぶ。あっという間に立方体は半分ほどの体積の直方体へと姿を変えていた。
と、そこでいきなり軽快な音が私の鼓膜を震わせた。反射的に顔を上げれば、ジンがきらきらと輝くシェーカーを力強くも正確に振っていた。
ほんの束の間、私は目を奪われていた。純粋に綺麗だと想った。モノクロの世界で光の残像を生む銀色のシェーカーは、やがて音もなく下ろされた時、全身に細かな水滴を纏っていた。細かな煌めきに包まれたそれは、最早、精緻な細工を施された芸術品のようだった。
ジンが私の前に新しいコースターとカクテル‐グラスを置き、そこへ完成したばかりの液体を注いだ。
透明なグラスが、桃色と紫色の間に位置しそうな鮮やかな色で満たされる。小さく歓声を上げて顔を近付けたら、透き通った花のごとき香りがした。些細な波さえ立てずに佇む様は、とても凛として真白の中に映えていた。
「良かったら、これもどうぞ。そのケーキに合う、一番のカクテルだよ」
そう言ってジンが穏やかに微笑んでくる。マキも温かい眼差しを向けてくれている。だから私には、今さら「お酒なんて飲めません」だなんて言えなかった。ましてや、ここで「未成年だから」などと断ったら、空気を読めない奴だと呆れられる気がしたし。
「カクテルって言っても、ほとんどジュースみたいなものだからさ」
何かを悟ったのか、アッキーがそんな事を言った。その上で、「でもまぁ、どうしても酒が弱いとかなら、無理にとは言わないけど」とも。
私は覚悟を決めた。「お酒なんて、大人ならみんな飲んでいるじゃない」と自らに言い聞かせた。下手にグラスを持ち上げようとしたらこぼしてしまいそうだったから、僅かに口を突き出して近付けた。冷えたグラスの縁に唇が触れた瞬間、私は同時に中身の冷たさと、さらに不思議な熱さめいたものを感じた。たった一口、啜ってみただけで、もうアルコールに対する抵抗感なんて消え去っていた。
アッキーに声を掛けられた時に食べていたアイスに近いかも知れない、柑橘類とはまた少し違う、爽やかな香りと優しい甘酸っぱさが印象的な味。舌触りなどは少なからず濃い気がするものの、そのおかげか舌に残っていたチョコレートの後味は余韻だけを置いて綺

麗に流され、しかも飲み干した途端に冷たさと相まって体を通り抜けていくような香味のせいか、アルコール臭さはほとんど感じられない。
濃い赤や紫ではなく、かといって橙色や黄色でもなく、単純な緑やましてや白とも違う。もしもこの味そのものの果物があるとすれば、きっとその実は黄金色をしているだろう。
ふうわりと鼻腔に広がる金色の名残を惜しんでいると、「良かった。気に入ってくれたみたいで」とアッキーが隣で嬉しそうに笑っていた。それを見て、何故だか私まで嬉しくなった。
ケーキを一かけ、カクテルを一口、こくのある香味がすっきりとした風味によってさらりと流される。私はもう夢中になっていた。こんなに素敵なデザートがあるなんて、この時になるまで知らなかった。お酒が人を虜にする理由も初めて分かった。コンビニに並ぶ二百円程度のケーキや、自動販売機で買える甘ったるいだけの缶ジュースなんて、これらと比べたら何と幼稚なものだろう。
新鮮な驚きと純粋な感動に、私の心は躍った。実際、いつしか鼓動まで速くなっていた。ケーキがなくなり、カクテルを飲み干し、それでも私の興奮は一向に冷めなくて、そうしたらアッキーがまた私の為に注文をしてくれた。ジンがシェーカーを格好良く振って、マキの笑声がそこに重なる。アッキーが自身のグラスを掲げて、私はそれにそっと新しいグラスの縁を合わせる。涼やかな音が火照った耳に心地よく触れる。細かな氷の破片が浮かぶ液体を口に含む。とても良く冷えているのに、不思議な熱さが喉を滑る。胸の内を落ちていった奇妙な矛盾の余韻が、息をした途端に果実めいた香りとなって鼻腔へと昇ってくる。最早、ただ当たり前に呼吸をするだけでさえ幸せを感じられる。
何て素敵な時間なのだろうかと思った。タケルとの諍いも、学校での息苦しさも、両親からの束縛も、何処か遠い世界に住む別人の事のようだった。
…いや、きっと事実として、そうだったのだ。本当の私は、こちらの方なのだ。あちらの方が、実は偽物の「私」なのだ。私はようやく、本物の「私」と現実に出会えた気がしていた。
次に気付いた時、私はベッドの上で横になっていた。いや、正確には、意識を失ったりはしていなかったのだけれど。それでも、ふと我に返って多少なりと冷静さを取り戻したのは、そこに至ってからだった。
「毛、薄いんだね」
ベッドの上に両手をつき、私に覆い被さる格好になったアッキーが愉快そうに言った。
私は取り払われた下着の行方を目で追いながら、ぼんやりと考えていた。
不思議と嫌悪感は無かった。恐いともあまり思わなかった。痛いだろうと知っていたけれど、それも大人になる為には仕方ないと割り切っていた。ただ、いくら薄暗いとは言え、全裸を晒しているのは少なからず恥ずかしかった。だって、白いシーツにしがみついているみたいに辛うじてベッドの端に引っかかっている下着の色は、そんな中でもはっきりと分かったから。
引き締まった胸板が近付いてきて、私の胸が潰れた。感じた息苦しさは、だけどやっぱり不快ではなかった。アッキーのキスは、タケルのそれよりも遙かに丁寧で、熟練されていた。でも、単純に優しさだけを比べたら、結果はまた違っていたかも知れない。
「魅力的だよね、胸の大きな子って」

アッキーが私の肌に手を当て、楽しげに指を動かしてくる。けれど私は、それよりも今にも破裂しそうなほどに暴れている鼓動を変に思われやしないかと、そちらの方が気がかりだった。幸いにして、彼は慣れているのか、わざわざそんな事を指摘してこちらを焦らせたりはしてこなかった。

そうして私は、文字通りアッキーに身を委ねた。彼のなすがままにされていると、時折、頭の中にタケルの悲しそうな表情が浮かんできたが、とっくに力なんて入らなくなっていた。自分はとても酷い事をしているのだろうと、自覚していたけれど、それでも悪い事をしているとは思わなかった。アッキーを特別に好きだとは、想っていなかった。

いよいよ彼が私の中に入ってきた時、私は堪えきれずに声を上げた。その痛みの激しさは、想像していたものの何倍も凄まじいだろうほどで、思わず閉じた両目からぽろぽろと涙が頬へこぼれた。だけど同時に、その痛苦は達成感も一緒に連れてきてくれた。ゆっくりとでも動かれるたびに、体に穴を開けられ、中身を引きずり出されるような感覚に襲われたけれど、彼が私の中で一往復するたびに、大人へと生まれ変わっている実感が強く湧いてきた。そうして遂に彼が私の最奥へ全てを吐き出した時、私はもう泣いていなかった。離れることなく腕を伸ばしてきたアッキーに抱き締められながら、私は内側でも外側でも触れ合っている肌の熱さを感じていた。

「…マジで、中に出して大丈夫だったんだよね」。しばらくして、ぼそりと耳元で発せられた問いかけに、私は緩慢な動作で身を起こしながら答えた。

「…うん。大丈夫だから」

思い出したように蘇った痛みに顔をしかめつつ、私は自身の股を覗き込んだ。

やはり部屋の仄暗さなんて関係なく、その証だけはとても鮮やかに見えていた。そして私は再び泣いた。ただし、子供みたいに泣きじゃくったりはしなかった。なぜなら、私はもう「大人」になったのだから。

深夜にはなったものの何とか終電で帰宅した私を、両親はきつく叱ったが、心配を掛けて申し訳ないと反省はしても、まるで恐いだなんて思わなかった。それどころか、むしろ滑稽にさえ見えた。いつまで経っても小言の止む気配がなかったから、「私、疲れてるから。続きは明日にしてよ」と淡々と告げ、半ば一方的に話を打ち切って部屋に向かった。去り際にちらりと見えた両親の呆然とした顔は、何だか酷く間抜けだった。

自分の部屋に入ると、何だかほとんどのものが色褪せている風にさえ感じられた。クラスの女子と遊園地へ遊びに行った際に盛り上がって買ったぬいぐるみも、壁に貼ってあるアイドルのポスターも、雑貨屋でたまたま見つけて衝動買いした小物入れも。だけど何より私の目につまらなく映っていたものは、部屋の片隅に落ちている、嫌になるほどに見慣れたランドセルだった。

私は爪先で軽くそれを蹴ってみた。使い古され、くすんで褪せた色は、少しも綺麗に見えなかった。そして私は確信した。もうこんな偽物の色は、私にとって必要ないのだと。

結局、アッキーとの関係は一夜限りの事だった。最後まで本名さえ聞かず、聞かれもせず、別れた私達なのだ、それも当然と言えば当然だろう。もしかしたら、あの店に行けば彼と再会出来るのかも知れないが、そんなつもりは皆無だった。だって、彼もまた私にとって必要ない存在になったのだから。あのケーキとカクテルだけは、またいつか味わいに行こうと思っているけれど。

いずれにせよ、そうして私の生活は変わった。輝きを失ったランドセルは捨てた。子供っぽいタケルとは別れた。勿論、クラスメイトなんてガキ臭くて付き合おうとも思わなかった。両親は急に成長した私に対する接し方を上手く見つけられないのか、何となくぎこちない会話を投げかけてくるくらいだった。

でも、少しも寂しくなんて無い。それどころか、誇らしささえ抱いている。

そして私は今日もまた、一人の大人として街を歩く。丁寧に化粧を施し、背筋を伸ばし、お気に入りの色のカバンを提げて、履き慣れたサンダルの踵を鳴らす。決して転んだりしないように気を付けながらも、小さくなることなく堂々と歩く。向かう先は、一件の病院だ。

不安なんて無い。むしろ一歩進むたびに、期待に胸が膨らんでいく。だって、これでもう、私は誰の目にも正真正銘の大人として映る事になるのだろうから。

本当に、私は今、心から、私の中に宿っているだろう「赤ちゃん」に一刻も早く会いたいと願っているのだ。

〈了〉